

氏 名	シャル サンドラ SCHAAL, Sandra
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	文 博 第 356 号
学位授与の日付	平 成 18 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 行 動 文 化 学 専 攻
学位論文題目	「女工哀史」言説についてのもう一つの視点：戦前日本における女性製糸業労働者の生活世界

論文調査委員 (主 査)
教 授 落 合 恵 美 子 教 授 伊 藤 公 雄 教 授 松 田 素 二

論 文 内 容 の 要 旨

戦前日本の製糸業に携わった女性労働者（女工）は、日本の近代化を支えた産業の発達に重要な役割を担い、日本の近代化に大きく貢献した。このため、彼女たちを対象とした歴史学的、経済学的研究はこれまでも数多く行われてきた。しかしながら、今日まで支配的であった製糸女工の社会的なイメージは、「女工哀史」的視点に代表されるように、彼女たちの生活史を哀れで悲惨なものとして描写する、極めてネガティブなものであった。

「女工哀史」的なイメージは、繊維工場における労働条件と生活状況を描写する、第二次世界大戦終戦前までに蓄積された膨大な資料から生じた。萌芽期にあった当時の資本主義の時代的要請から、1890年代以降の製糸業の経営者は安価で従順な労働力を求め、貧しい農家に生まれた女性たちに目をつけた。前近代的な年季奉公的な契約によって製糸工場に雇われた女工たちは、低賃金で厳しい労働条件の下で働かされ、寄宿舎に拘束されて苛酷な集団生活をするを強制された。19世紀末から、このような状況に対して、社会主義者、ヒューマニスト、新聞記者、官僚たちは、繊維女工をはじめとする出稼ぎ型の工場労働者の状況を調べて激しい批判を行った。こうした報告が積みかさねられる中で、工場労働者の労働条件と生活状況についての膨大な資料の蓄積が作り出されていった。

これらの資料が明らかにした、製糸工場における女工の実態の過酷さを否定することはできない。しかしながら、これらの資料を作成した人々の大半は、女工たちが置かれていた状況については工場の内部にのみ注意を向け、急激な工業化に伴って生じた諸問題に焦点を当てることに終始したため、女工たちの工場労働の背景にあった農村での社会経済的な現実という側面を無視した。その結果として、彼らは女工たちの生活史についての脱落のあるイメージを伝えてしまうことになったのではないかという疑問を呈することができる。

一方、これらの資料に基づいて、女性労働者が資本家に一方的に搾取され抑圧されているという資本主義批判が起り、女工に対する画一的な表象、女工の哀れなイメージを強調する女工哀史言説が、とりわけ1930年代のマルクス主義者たちによって広められ、定着していった。このドグマは後に、何世代にもわたる社会科学者たちによって採用され、日本資本主義発展の犠牲となった彼女たちの生活史は哀れで悲惨なものであったという社会認識を再生産していった。このようにして「女工哀史」的見方は確立された。

ここでも、我々は、戦前日本の製糸業に関する従来の研究の大半が、女工たちの生活史を日本資本主義の形成史と関係づけることに終始し、当時のマクロな社会・経済的な構造に限定して分析を行ったものである、と異議を唱えることができる。なぜなら、このような研究においては、近代化と工業化がもたらした矛盾に焦点が当てられるものの、女工たちにとっての日常的な現実とは、見落とされてしまったのではないかと思われるからである。この結果、こうした研究は、女工の生活史について、脱落のある、時には偏見のある表象を再生産してしまったのではないだろうか。

本研究は、このような観点から、戦前日本の女性製糸業労働者たち自身の〈声〉の分析を通じて、彼女たちが自らの女工としての経験をどのように認識していたのかを明らかにし、彼女たちにとっての個人的で多面的な現実を日本近代史並びに

日本女性史の中に位置付けることを目指した。言い換えれば、これまでしばしば「虐げられた人々」とのみ捉えられてきた彼女たち自身による自らの経験についての表現が、「女工哀史」的な言説群に包含されるか否かということ、さらに「女工哀史」的視点を乗り越えていくのを可能にするか否かということ、を、実証的に検討した。本研究は、「女工哀史」的視点を再検討しながら、彼女たちの生活史について新たな解釈の可能性を探求し、彼女たちの生活史についてのより包括的な「知識体系」を構成することを試みたと言うこともできよう。

以下に、各章の内容を簡潔に記す。

まず、第一章においては、戦前までの日本の製糸業の経済的な発展とその歴史的背景を説明した。

次に、第二章においては、戦前日本における製糸女性労働者の状況を検討することが課題となった。製糸工場で働いた女工が、〈犠牲者〉あるいは〈搾取された者〉として一般に見なされてきたのは何故なのか、さらに、女工たちの生活史が過酷なものとしてしばしば描写されてきたのは何故なのか、この二つの疑問に答えるために、製糸業についての様々な研究や調査などに見られる、この産業における労使関係の特徴、製糸工場で働いた女性の労働条件と生活状況を分析した。

そして、本稿の中心的な部分をなす第三章と第四章という両章においては、実際に製糸女工の〈声〉の検討を通して、彼女たちが自分の女工としての経験をどのように認識していたのかを究明した。第三章においては、製糸女工の「歌われる記憶」として捉えることができる、明治後期から大正時代にかけての時期を中心として歌われていた（あるいは歌われていたと考えられる）45の糸ひき歌の内容を考察した。第四章においては、ライフ・ヒストリー・メソッドを用い、大正後期から昭和初期にかけての時期の製糸工場に勤めた元女工たちを中心とする70名の聞き取り調査の結果を分析した。

最後に、結論部においては、糸ひき歌の分析から得られた結果と聞き取り調査の分析から得られた結果を比較、総括し、戦前日本の製糸女工、つまり農村社会に生まれた女性の観点を導入することによって、「女工哀史」的な視点を相対化し、読み直すこととした。

では、本論文の分析からどのようなことが明らかになったのだろうか。第三章の糸ひき歌の内容の分析から、製糸女工の工場世界の認識や自己表象は、緊張や矛盾をはらんだ複雑で多面的なものであるということが示された。

多くの糸ひき歌のなかで、女工たちは製糸工場における労働の世界について否定的な表象を伝え、自分たちの置かれている状況に対して怒りや反抗心も見せている。彼女たちは、工場内における劣悪な労働・生活環境、抑圧的な扱いや否定的な女工観に対する自分たちの憤慨や批判を表明するために、ひいては自らの主体性や価値を主張するために、糸ひき歌を抗議の武器として利用したのである。

しかしながら、それと同時に、糸ひき歌は、工場で働く経験において良い面もあったということを暗示することもある。貧しい農村に生まれた女工たちの一部は、孝行娘として行動し、町へ出て賃労働者になることによって、故郷の農村において社会的に認められることができた。さらに彼女たちは「都会の雰囲気」と接することを通じて、新たな世界を知り視野を広げる機会を得て、自分たちがこれまで送ってきた農村での生活をあらためて相対化する視点をもつようになった。糸ひき歌の中には工場世界についてのポジティブな表象も見出されるのである。

一方、第四章においては、元製糸女工を中心とする聞き取り調査の結果の検討から、語り手の過半数が女工の生活史を悲惨なものと思えず従来の描写に対して、強い違和感を覚えていたことが分かった。

語り手たちは、製糸工場内における仕事を「難しい」または「えらい」ものだったとしばしば語っている。しかし、多くの糸ひき歌とは異なり、彼女たちは、工場労働そのものを「悪」と捉えることもないし、自分たちを「工場のとりこになった労働者」と捉えることもない。現在になって自分たちの置かれていた状況を思い返し、それは「搾取」であったと述べた元製糸女工は聞き取り調査の中で2名存在したが、当時の農村社会の人々、また当時の彼女ら自身は、必ずしもそのような受け取り方をしていなかった。

製糸女工にとってだけでなく、貧しい農村家庭に生まれた多くの者にとっては、戦前期は等しく「厳しい時代」であった、と語り手は言う。そして、自分の貧しい家族の家計を助けることが親孝行と捉えており、当時の農村社会の通念として、家族と離別して辛い目に遭うことは、社会的に重要視されていた「苦勞」の一種であった。女工たちは、工場仕事を一所懸命に覚えること、つまり「一人前」になるための一つの段階を超えようとすることを通じて、後の人生の難関に立ち向かうための資質を獲得することができた。

加えて現実的な生活のレベルでは、彼女たちは製糸工場の労賃や日常生活に良い面も見いだしていた。製糸工場で働くことにより、実家にいるのとは比べてより良い生活レベルを享受することができたうえ、製糸工場での労賃は彼女たち自身あるいは家族にとって、自由に使える現金収入となった。工場で稼いだ賃金が貧しい農村家庭の多くにとって無視できない現金収入となったため、語り手の多くは故郷の家族や村人からの尊敬を勝ち得ることに成功し、さらに最良の場合には、農村において重要な役割を果たし、周りから一目置かれる存在にもなった。また、10代で働きだした大多数の語り手にとっては、故郷から離れて工場で働くことは、両親の監視から解放され、家制度が支配する当時の農村では経験のできないような都市生活の楽しみを得て、都会の消費生活を僅かながらにしろ享受する機会であった。このように、従来の研究が否定的に描き出してきた製糸工場の生活は、語り手の一部（および糸ひき歌を歌った女工の一部）にとっては、近代社会のきらびやかながやきに向かって開く窓を与えたと言えるだろう。

確かに、戦前期の日本資本主義の構造そのものは根本から変革されることはなく、その結果として、「女工哀史」に代表される激しい批判を招いた製糸女工の状況は本質的に変化しなかった。しかし語り手の話は、そうした現実を差し引いても、糸ひき歌と同様に、現実起こった出来事としての事実と、人々が認識している事実が、ともに複雑で多様なものであり、製糸女工の生活史を「女工哀史」と名づけて単純化するのとは不可能であるということを示している。

本研究では、当時のマクロな社会・経済的な構造のみを分析した従来の研究では語られていない製糸女工たちの生活史を、彼女たち自身の〈声〉によって語り、ニュアンスに富んだ豊かな表象、さらに、少なくとも戦間期以降については、ポジティブとさえ言える表象も可能であるということを示した。女工たちの〈声〉からは、製糸工場で働くことは苦労のみならず喜びや楽しみの源泉にもなりえたこと、彼女たちの多くは当時の社会的および文化的な環境から強い影響を受けながら、何よりもまず自分や家族の利益・幸福を守ろうとしたこと、そしてそうした自分の選択を正当なものと感じていたということが聞き取れる。彼女たちの〈声〉は、女工たちが受身的な存在にとどまっていたわけではないことを示している。このように考えると、彼女たちの言説は、女工哀史という文脈や、資本家へのレジスタンスという文脈で捉えるよりも、時代の制約を受けながらも、女工たちが主体的に生き、自らの存在をポジティブに認識していたことを示すものとして、別の文脈に位置づけるほうが妥当なのではないだろうか。

本研究は、製糸女工たちに対する画一的な表象、彼女たちの哀れで悲惨なイメージを強調する「女工哀史」的な視点を相対化するだけでなく、製糸女工たちの生活史についての新たな解釈を提示し、「女工哀史」的な視点を乗り越える新たな方向性を示しえたということができよう。

論文審査の結果の要旨

近代日本の工業化は、製糸業、紡績業などにより牽引されたが、これらの産業に従事した労働者の圧倒的多数は女性であった。これらの女性工場労働者、すなわち女工の社会的表象は、彼女たちが日本国家の近代化に果たしたポジティブな役割とは裏腹に、きわめてネガティブなものであった。貧しい農家の出身で、寄宿舎に拘束され、劣悪な労働条件のもと、低賃金の長時間労働に従事した犠牲者というイメージである。いわゆる「女工哀史」的イメージといえよう。

「女工哀史」という表現は、1925（大正14）年の細井和喜蔵の著作『女工哀史』により広まったが、女工の悲惨な労働と生活への注目はそれに遡る1890年代後半には始まっている。繊維女工をはじめとする出稼ぎ型の工場労働者についての詳細な調査報告が次々と発表され、労働条件や生活状況の改善の必要が唱えられた。マルクス主義思想が広まると、女工は半封建的農村の小作制度による収奪と資本主義的搾取とを一身に受ける存在と位置づけられた。戦後になってもこうした女工イメージは受け継がれ、なかでも1968（昭和43）年の山本茂美の著作『あゝ野麦峠』は、女工哀史言説の大衆的流布の一因となった。

急速な近代化と工業化がもたらした矛盾が、女工の労働と生活に影を落としていたのは事実であろう。本論文でも、第2章で同時代の実態調査を引用し、女工の過酷な労働条件や健康障害、生活状況を詳細に検討している。しかし、マクロな社会・経済的構造の解明に重きをおく分析は、女工の生活史の全体の一部にしか光を当てていない。また無抵抗で受け身な存在としての画一的な女工像は、彼女たちの多様性や主体性を押し隠す効果をもったのではないか。このような点を批判して、1980年代以降の女性史は、女工歌などに表れた女工の抵抗に照明を当てた。

本論文は、このような研究史を背景に、明治後期から大正期にかけて製糸女工によって歌われた糸ひき歌45点と、おもに長野県において自らインタビュー調査を実施した40名、および岡谷蚕糸博物館が記録している30名の元女工等のライフ・ヒストリーを分析することにより、女工哀史的視点を実証的に乗り越えて、女工たち自身の〈声〉に拠って立つ歴史像の再構築を試みたものである。

本論文の意義は、まず、自らが実施したインタビューの記録をはじめ、収集した資料の量的および内容的な圧倒的な豊かさと、それを十全に活かした女工たちの実践的な生活世界の再現にある。大正後期から昭和初期にかけて女工経験がある方は、すでにかんがりの高齢に達しているが、丹念な探索の結果、99歳（面接当時）を最高齢に90代・80代を中心とする40名の高齢女性と少数の男性の面接を実施することができた。得られたインタビュー記録は、経験や価値観を感情豊かに語ったもので、外国人留学生という特殊な立場を考えればなおのこと、フィールドワーカーとしての筆者の力量をよく示している。今の時期に残さねば永遠に失われるかもしれない女工たちの語りを記録にとどめた意義は大きい。

一般にライフ・ヒストリー分析の社会的意義は、主観的な経験の再構成を通じて、当事者が出来事の意味づけや自らの方向づけのよりどころとした価値体系と規範的基準を明かにする点にあるとされる。本論文では、たとえば第4章の語り手の過半数は、女工になることを特に悲惨な境遇とはとらえてはおらず、「普通」とみなしていた。女工になることは豊かな家の娘もする嫁入り前の「修行」とされ、女工にならなければ女中や芸者、養蚕の手伝いなどのより過酷な仕事が残っていたという出身農村の環境が、彼女たちの価値観や規範意識を形作っていたからである。工場の仕事は「辛い」または「えらい」としばしば形容されるが、多くの語り手にとって苦勞することや辛抱することは「あたりまえのこと」であり「良いこと」でさえあった。また、少なくとも一部の女工にとっては、家父長的な家を離れ、映画などの都市的な消費生活を楽しむ機会も与えてくれた工場生活は、「近代化に面するきらめく窓でもあった。」

本論文の研究史上の意義は、「女工哀史」的な視点や、それを批判して「虐げられた人々」の「抵抗」に注目する視点のどちらも超えて、「当事者の観点からの歴史」を描き出した点にある。女工の生活史を、女工である以外の側面も含めて、多面的かつ包括的にとらえる本論文の方法は、当事者の自己認識と社会認識の再現を可能にし、「女工哀史」史観が都市部エリート層の「まなざし」であったことを批判的に浮かび上がらせた。当事者である女工たちは、当時の社会的・経済的制約のなかで、自らが身につけた価値観や規範をよりどころとしながら、自分や家族のために主体的かつ戦略的に行動し、自分の選択や達成にしばしば誇りすらもっていた。

以上のように、本論文は充実した資料にもとづいて、「女工哀史」的視点の限界を示し、乗り越えの方向を示した。当事者視点からは捕捉しきれない社会構造をどのように把握するのかといった理論的問題、ジェンダー規範の変化が「女工哀史」史観の形成に及ぼした影響など、追究が不十分に終わった点もあるが、こうした点は今後の研究で乗り越えられていく課題であり、論文の価値を損なうものではない。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2006年2月14日、審査員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。